

1991年5月10日

古い記録 新しい記録

内田 康夫

日本産鳥類の記録に関することで最近筆者が係わった新旧の例2件について述べる。

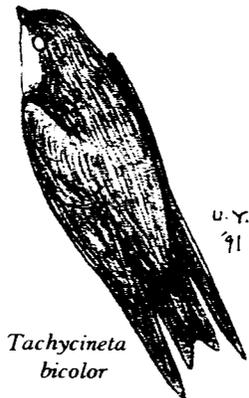
羽前(山形県)庄内藩の幕末の藩士・松森胤保(1825~1892)は、庄内地方の陸産海産の動植物を網羅した大著「両羽博物図譜」全59巻(両羽とは羽前・羽後を合せた称)を残したが、同書中の白眉は禽類の部の14冊であり、絵図の正確さと記述の周到さから今日でも十分通用する卓越した科学性を備えている。同14冊中の実写図(模写等を除いたもの)はすべて種の同定ができ、計291種、そのうち日本産は250種(他は家禽・飼鳥)、庄内産は230種を数える。これは、鳥の採集または写生の年月日・全長・翼開張・嘴長・跗蹠長・体重等の記載から、生息地・行動・鳴き声・食性・巣・卵雛・白化等の変異体に至るまで実に綿密な記事が付されているためである。その詳細については、磯野直秀氏と共著で慶応義塾大学日吉紀要(1989, 1990, 1991)や日本の生物(1988, 1990)に発表して来たが、今後も引き続いて発表の予定である。

その中から、稀少種の記録として重要なものを以下に列挙する。まず、庄内産で、()内は保護・猟獲または死体(剥皮を含む)拾得の年代を示す。アホウドリ(1853, 1889)、シラオネツタイチョウ幼(1890)、シロフクロウ(1879)、キンメフクロウ(1878)、オオカラモズ幼: Stejneger が1891年に記載した神戸産のものと同年!、ヤマヒバリ(1875)、オガワコマドリ♂(1889)、ハシブトオオヨシキリ(1890: 図と共に嘴長値あり。オオヨシキリやエゾセンニュウは別途記載)、マミジロキビタキ♂(1883)、ツリスガラ(1852)、シラガホオジロ(1883~1891間に6例)、シマノジロ♂(1865)、ユキホオジロ♂(1873)、アカマシコ♀型(1886, 1889)。これらの他にも確実性の高い記録として、オオノスリ(1886, 1889)、オオトウゾクカモメ(1891)、ムジセッカ(1841)、コホオアカ(1881)がある。

また、庄内以外の記録で胤保の別著「遊覧記」にあるものとして、クロトキ幼(1865, 埼玉・野田)、ソデグロヅル成2幼1(1864, 東京・浅草)の観察記録がある。なお、ソデグロヅルについては、京都博物館蔵「探幽縮図」中に、同成鳥の全体および部分詳細図があり、猟獲は1667年、場所は江戸もしくはその近郊と推定され、Pallas による本種記載(1773)の100年以上前のことである。

つぎの件に移る。青森県むつ市の三上士郎氏の博物館に一体の *Tachycineta bicolor* (Tree Swallow) がある。一時、その拾得時の記録が不明となったため正式発表に至らなかったが、その後当初の記録が発見され、現在標本と共に筆者が預っている。正規論文は別に準備中だが、その要旨を以下に掲げる。

1962年10月20日、北海道襟裳岬灯台にて拾得、♀成鳥。全長125mm、翼長117mm、尾長54mm、



*Tachycineta
bicolor*

U. Y.
91

尾差9mm, 露出嘴峰4.5mm, 跗趾約10mm (著しく破損, 右脚のみ付着)。頭・肩・羽・背・腰は暗青色光沢のある黒色。翼と尾は黒色。下面は喉から下尾筒まで白色。胸側に頸側の黒色がやや張り出し, 脇は燻灰色。翼をたたむと翼端は尾端を越す。

ところで, 本種の和名だが, 小林桂助氏(保育社図鑑)や山階芳麿氏(世界鳥類和名辞典)はミドリツバメとしている。しかし, 本種背面の光沢は必ずしも緑色とは限らない。一方, 中米産の同属の他種の中には, まさに緑色鮮やかな種がある。むしろ本種の英名の 'Tree' (樹洞営巣性)を生かして, ジュドウツバメとした方が適切と思われる(たとえば「日本の生物・鳥」浦本他, 文研, 1978)。前記和名辞典は労作だが, もともと地域別に命名していったので系統的には不適切なものがあり, 中には別種に同一和名がついている例さえある(同書種番号5787と5803)。名称変更は慎重であるべきだが, 目録改定時はよりふさわしいものを探る一つの機会ではないだろうか。

鳥類目録改訂第6版の中間報告

藤 卷 裕 蔵

鳥類目録改訂第6版の出版計画を皆さんにお知らせしたのが, 鳥学ニュース№17(1985)である。その後ニュースを通して何回か資料収集をお願いしたり, 大会総会で進捗状況について報告してきたところであるが, 実のところ前回総会で報告して以来あまり進んでいないのである。発刊が予定よりかなり遅れていることをまずお詫びしたい。ここで現在までの進捗状況と, 新しい目録の形式の概要を紹介しておきたい。

各種について各都道府県ごとの分布, 生息期間, 繁殖の有無などの基本資料の収集はすでに完了した。同時に目と科の順序, 分類群の名称変更や新たに目録に収録する種の点検も行ってきたが, 収録する種の点検については現在もまだ進行中である。

まず, 目と科の順序であるが, 第5版とまったく同じだが, 「ヒタキ科」は「ツグミ科, チメドリ科(ダルマエナガ科をチメドリ科)に変更), ウグイス科, ヒタキ科, カササギヒタキ科」に分ける。また目と科の順序はピーターズの「世界鳥類目録」とはほぼ同じであるが, 最近の研究に基づく「新分類体系」は今回の目録では採用しない。ただし, その代りに分類に関する解説をつけることにした。

次に分類群の名称変更は次のとおりである。

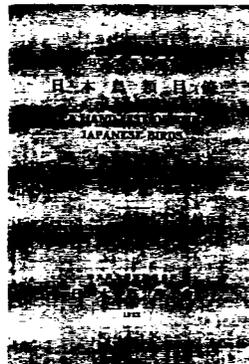
「ガンカモ目」 → 「カモ目」
「ガンカモ科」 → 「カモ科」
「ワシタカ目」 → 「タカ目」
「ワシタカ科」 → 「タカ科」

「ホトトギス目」 → 「カッコウ目」
「ホトトギス科」 → 「カッコウ科」

これまで移入種の取扱いかたが種によって異なることがあったので, コジュケイ, コウライキジなどの移入種は目録から削除し, 野生状態で最近繁殖が確認された飼育鳥などとともに, 付録にまとめることにした。以上が第6版についてこれまでに決まったことである。

現在以上の基本資料をもとに各執筆委員が原稿を作成中で, 一部の原稿はすでに出来上がっている。執筆委員は川路則友, 竹下信雄, 中村一恵, 中村登流, 中村浩志, 長谷川博, 藤巻裕蔵, 松岡茂, 柳沢紀夫の9名である。

次ページに目録のサンプルを「ノビタキ」を例にして紹介しておく。費用の関係で第5版のように英語版, 日本語版とわけての出版は難しいので, 和欧混合の文章とならざるをえなくなった。



大正11年に出版された第1版の表紙

SAXICOLA Bechstein ノビタキ属

376 Saxicola torquata (Linnaeus) ノビタキ

Nobitaki Stonechat

Palaearctic-Ethiopian, from Europe to Far East regions; much of Africa, and Madagascar. Resident or partially migratory, wintering in Africa, Arabia, India and se Asia.

Saxicola torquata stejnegeri (Parrot) ノビタキ

Range: Breeds in c & e Siberia east to the Kolyma Basin, south to n Mongolia, ne China, Ussuriland, Sahalin and Japan. Winters in s China, se Asia, Philippines, and Borneo.

Status: Common MB in Hokkaido and locally common MB in n & c Honshu, CB in Kyushu. PV in sw Japan. March-April to May and August to October-November. Small numbers may winter in sw Japan. Habitat: Open grasslands and meadows, cultivated lands and pastures; also alpine meadows in Hokkaido. Shrubby grasslands in the highlands in n & c Honshu.

[Note]: (分類などに関してコメントを必要とする場合)

北海道 (MB), 本州中部以北 (MB: 岩手、秋田、福島、栃木、新潟、山梨、長野)、九州 (CB, B-1: 北九州市1981)、中部以西本州 (PV)、四国 (PV)、九州 (PV)、佐渡、屋久島、種子島、伊豆諸島大島、八丈島、鳥島、対馬 (PV)、琉球 (WV: 石垣島、西表島、与那国島)。

北海道では、農耕地、牧草地、山地の草原などに広く繁殖するが、本州では高原に繁殖し、分布は局地的である。近年北九州市で繁殖が確認されている。

(第2の亜種があればここから上記亜種同様に記載する)

最近の入会状況

福田道雄

最近鳥学会には、毎年40~60人が入会している。その詳しい実態については一部の関係幹事しか知らないというのが実状であった。そこで、それをまとめてみると、面白いニュースの記事になるのではないかと思われた。そして、やってみたのがこの記事である。残念ながら、これといった特徴もなく、ほぼ毎年同じ傾向を繰り返しているだけのようであるが、とにかく実態を知っていただくということで、図を使いながら、解説してみることとする。

資料は比較的きちんと申込書を取り始めた1985年から昨年までの6年間の個人会員のもののみを対象にした。また、集計は保存された本人記載の申込書のみに基づいたもので、未記入部分も時々あったので、各項目の集計数は異なっている。なお、集計した申込書数は1985年から1990年分まで、それぞれ81, 56, 54, 51, 44, 64枚であった。

1. 入会時の年齢構成

集計を平易にするため、全員が1月1日生

まれとみなした（多分これでもそんなに大きな違いはないと思う）。図1で年度別に、各年齢層の人数を示した。いずれの年度も30代までが半数近くを占めるので、それをさらに25歳までと、26～30歳に分けた。最も多いのは高校生（数人）から就職間もない25歳までの年齢層であった（入会数の多かった85年のみ、20代後半が多かったが、原因は不明）。40代以降の入会者は少ないが、60代以降でも入会する人がいたのには、少し驚いた。

2. 学生と教員の入会者数

便宜的に学生と区分した内訳は、7～8割が大学生で、後は院生や研究生、高校生などである。また、教員の内訳は、多くが中・高校で、他に小学校や大学である。

図2に示したように、学生はだいたい10ないし20人であった。本会には学生会費が設けられていないことも（入会金は免除しているが）、少しは影響しているかもしれない。教員の数はもう少し多いような気もしていたが、

6年間ともほぼ10数人で、20～30%を占めるにとどまった。しかし、なにかの形で鳥に関する研究機関等所属者を含めれば、合わせて4～5割になるのではないだろうか。

3. 女性の入会者

81年から90年までの入会者数は、5、5、6、5、7、5人でほとんど年変化がなかった。女性のほとんどは学生入会者で、卒論などで鳥を対象とした人であった。

これらの事から、入会者を増やす有力な方法は、意外と、女性の社会人を勧誘することかもしれない。

本来、会員数の増減をみる上では、調査は複雑になるが、入会者と退会者の関係を検討する必要がある。在籍年数や退会原因が重要な項目となるだろう。それらは別の機会に譲ることにして、最後に81～90年の、各年の12月31日付の個人会員数、入会者数、退会者数の変化を図示することで締めくくりたい。（図3）

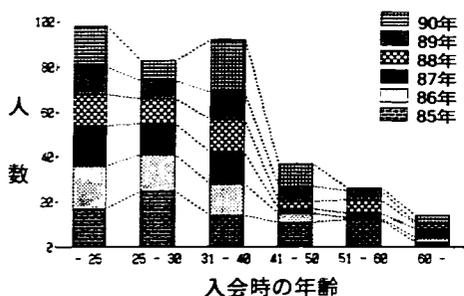


図1 入会時の年齢構成

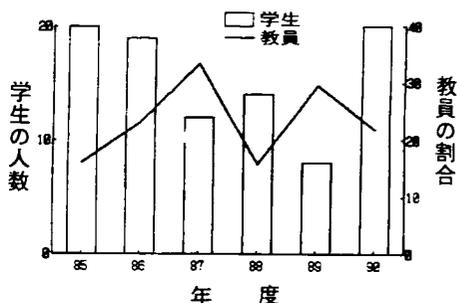


図2 学生入会者数と教員入会者の割合

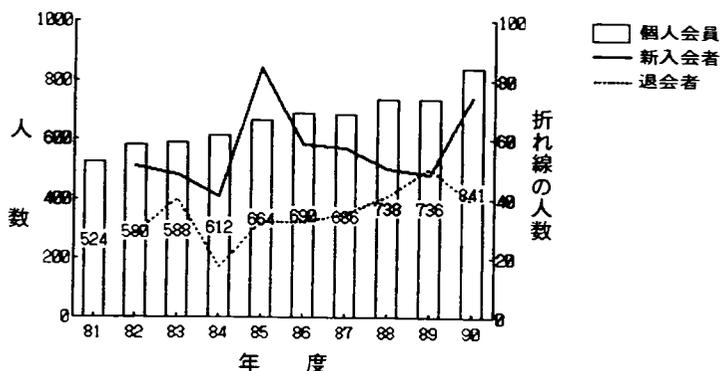


図3 会員数・入会者数・退会者数の推移

国際シンポジウム「環境と内分泌からみた鳥学」

Environmental & Hormonal Approach to Ornithology が、1991年11月27日(水)~30日(土)にインドのヒマラヤの麓のスリナガルで開かれます。第2回アジア・オセアニア比較内分泌学会(インド・デリー)のサテライトです。内容は鳥類に関する生態学、生理学の基礎研究及び希少鳥類の保護・繁殖や家禽学などの応用研究です。特に環境適応と内分泌系の関係が中心となります。会期中にはバードウォッチングやヒマラヤの自然探索の機会が多数用意されます。サーキュラーを希望する人は下記へ申込んで下さい。

【問合・申込先】 Dr. Asha Chandra - Sakulani, Post Box 45 Srinagar, Garhwal, U. P. 246174, INDIA

日本鳥学会金沢大会を終えて

池田善英

1990年度の日本鳥学会大会は10月13日(土)~14日(日)に石川県金沢市の金沢大学で開催された。北陸地区での大会開催は初めてであり、日本海側の都市としても新潟に次いで二度目である。北陸、とくに石川県では、地元野鳥の会などによる保護・普及活動が活発な割には、アマチュアを含め研究者の密度は極めて低く、目立った研究成果も上がっていない現状である。こんな当地で大会を開催しないかとの打診を会から受けたのは、1989年度の大会後であった。会の思惑はさておき、結果的に二つ返事で引き受けたのは主として以下の理由による。

まず、北陸地区の学会員が集まり1985年に設立した「北陸鳥学懇談会」(ニュースNo.29, 参照)における1990年までの12回の例会で33題の発表があったが、そのほとんどが学会大会で発表されず、ローカルな話題のまま埋れていた。これは最近10年間を見ても、大会開催地のほとんどが東京近郊から東日本に偏っていたことが(同No.26)、北陸地区の内向的(?)会員が全国大会を体験するには大きな障壁となっていたと思われた。次いで、私が在籍する金沢大学生態学研究室では、今回の大会準備委員長を果たされた大串龍一教授(昆虫専攻)の方針により、学生の自主的な研究テーマ・材料の選択が可能のため、卒論・修論の研究材料に鳥類を選ぶケースも少なからず見受けられる。しかし最近まで博士課程がなかったこともあってか、研究成果を学会で発表するという、大学院生として極く当たり前のことが余りなされなっていた。各々の調査研究がある程度まとまったら、揃って大会に参加・発表されることを期待しながら、懇談会では世話人を引き受け、研究室では年長の院生である私としては、分不相応ながらこの機会を見逃ごすことができなかつたからである。

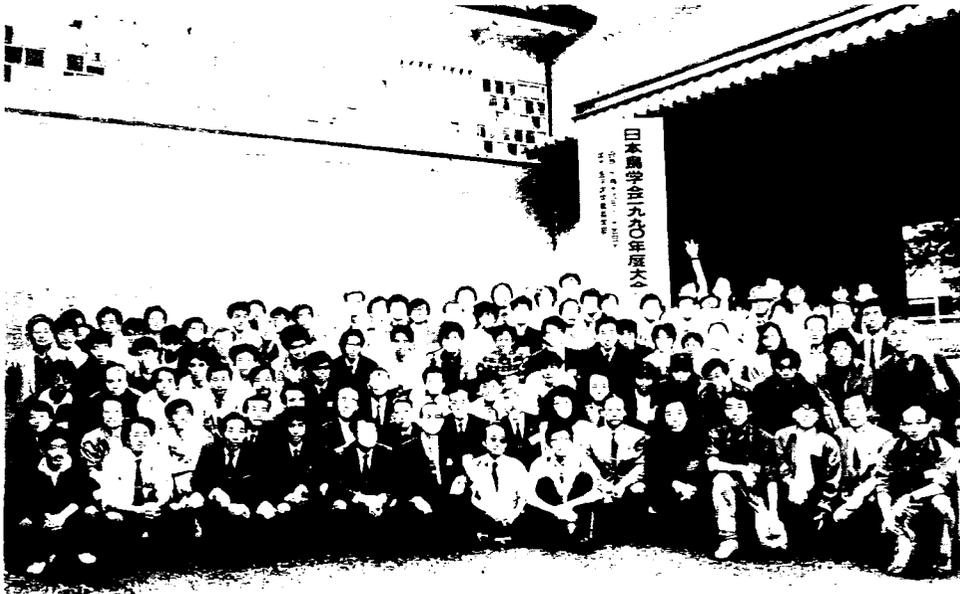
種々の不安材料は最後まで残ったものの、結果として大会参加160名(当日参加39名)・懇親会参加119名+α・エクスカージョン参加27名、口頭発表2会場34題・ポスター発表11題・シンポジウム3題と、地方での大会としては盛況であったと思う。一般講演件数が予定より少なく、第一日(土曜)の開会を午後にしたため、遠方から前日宿泊なしでの参加を可能としたことが結果的に好評のようであった。また地元や金大卒業生も、参加35名・発表9題と私の主たる目的もほぼ達成された。

運営方法は1989年度大会にならぬ、事務的な面なるべく省エネを図り、10部門の委員からなる準備委員会を組織して業務を分担した(同No.33)。コンベンション都市を目指す金沢には、設備の整ったホテルや会館などが多数存在するが、経済性を最優先に(懇親会後を考慮し繁華街に最も近い)金沢大学城内キャンパスの学部教室等を借り上げて大会ならびに懇親会場とした。これらにより参加者にはサービス低下もさほどなく(文中ですが、若干名の方にご迷惑をかけた、参加手続上の不手際をお詫び致します)格安な参加費で運営されたと思うが、今回の

準備を進める上でいくつか難点があった。

まず、わずかな大会参加経験者しか地元に住なかったため、準備委員会の組織が困難であった。加えて、すべての会場を大学内の施設（一般に開放された公共施設ではない）としたため、大学関係者にしかできない諸手続きや細部の準備作業が多くあった。特に、大学院学生では及ばぬ会場借り上げでは、鳥学会とは関係のない私の指導教官に大会責任者になって頂くよりほかなかった。また当日前後の臨機応変な対応においても、北陸3県外から参加の卒業生やアルバイトなどの協力なしでは、到底やりぬけなかった。

最後に、今後の増えることを期待する地方での大会開催にあたって、今回の経験より得た留意点を述べさせて頂く。まず、大学での大会開催は意義深いと考えるが、主だった準備スタッフが大学関係者でない場合、大学を会場とすることは至難である。借りられる場合でも、学会開催の便宜が図られていない大学の施設などを会場とするには、それを補うため準備・運営業務が激増する。このため十分な人数と経験を持ったスタッフが揃わない場合、会館やホテルなどの利用を積極的に考えてもいいと思う。それにより一人当たり数千円の参加費値上げを招いても、より多く地方での大会開催が実現されることが、地方の学会員にも刺激となるばかりでなく、学会自体の活性化にもつながると考える。



金沢大学の正門である 金沢城石川門にて (1990年10月14日)

ポスター展示と忘年会の報告

昨年に続いて2回目の“ポスター展示と忘年会”が、暮れもおしつまった12月22日午後3時から、立教大学で開かれた。参加者は19名。「繁殖期のツミの獲物と育雛期の獲物量の変化 (植田睦之)」、【東京都水道局水源林内における巣箱の利用状況 (湯本光子)】、【妙高山におけるウグイスの番い関係について (濱尾章二)】、【ヨシゴイの集団繁殖 (内田博・松田喬)】の4篇のポスターと、松田喬氏のビデオによる「オオヨシキリの巣へのカッコウの托卵」が発表され、ワインを飲みながらの議論がはずんだ。続いての忘年会では、持ち寄りの手料理を囲んで、各自の研究紹介が行なわれ、11月末から12月始めにかけてニュージーランドで開催されたICBPとIOCの模様、そしてニュージーランドの鳥と自然が、黒田長久・中村司両氏の写真と、石田健氏と筆者のスライドで紹介された。

(上田恵介)

●九州でのホシガラスとオナガの
情報をお願い

ホシガラスは、九州山地の祖母山（1963年）、大崩山（1970年）・三方山（1972年）などで観察されており、1990年7月13日には内大臣（熊本県）で親子連れも観察され撮影された。

オナガは、北部九州の主に佐賀から福岡県南部にかけて生息していたが、1962年ごろに絶滅したとされている。熊本県でも1924年、球磨郡湯山で川口孫治郎氏による観察記録がある。筆者も1961年ごろ、熊本市黒髪5丁目で観察したがメモがなく、記憶もあいまいである。

九州でのホシガラスの観察およびオナガの昭和37年（1962）以降の情報をお待ちの方は情報提供のほどよろしくお祈いします。

〒860 熊本県熊本市春日 4-9-8

TEL 096-325-7738 （大田真也）



●ヤンバルの鳥類分布調査終了

この3月10日、沖縄野鳥研究会が1987年から沖縄本島北部で取り組んできた鳥類分布調査が終了しました。最終調査は大宜味村大保川上流で実施。3人のメンバーが最後まで残った未調査ポイントへ分け入り、データ収集に当たりました。定点カウントを中心に実施した鳥類分布調査は、調査地点だけでも延べ数百に及んでおり、今後はデータの整理・分析、まとめへと作業が続くことになります。調査の過程では鳥類観察だけでなく、今なお森林破壊が続くヤンバルとそれをめぐる人々

の様々な動きにも強く心を動かされたものです。

会としての調査の総括および発表はまだ先のこととなりますが、成果の一部は既に県や国の調査報告書で中間報告として明らかにしてきたところです。すなわち「与那覇岳及びその周辺地域におけるメッシュコードによる鳥類調査結果（中間報告）」（沖縄県環境保健部自然保護課「特殊鳥類等生息環境調査」77頁、1988年）、「西銘岳及びその周辺地域における鳥獣分布調査」（沖縄県自然保護課「特殊鳥類等生息環境調査Ⅱ」123頁、1989年）、「沖縄島北部における鳥類の分布状況」（環境庁自然保護局「昭和62年度沖縄島北部地域調査報告書 南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究」171頁、1989年）など。これらは、現在作業が進められている国設鳥獣保護区新設のための基礎資料として生かされることになるものと思われます。（慶田城健仁）

●南極便り(3) <最終回>

南極も10月に入ると、日照時間が急速に長くなり、11月下旬から太陽が沈まなくなります。24時間観察ができるというのはうれしくもあり、つらいところでもあります。このところオゾンホールが発達しているせいでもないのですが、日射は想像以上に強烈で、いっばつでひどい状態になります。サングラス・リップクリーム・強力な日焼けどめが必需品です。11月14日「しらせ」が東京・晴海を出港したとの電報が先日入り、そろそろ日本の現実が思いおこされます。

11月中旬、基地周辺のいくつかの露岸（岩石の露出した海岸）でアデリーペンギンの産卵がはじまりました。リュツォホルム湾はアデリーの分布域西端にあたり、年中はぼ海水におおわれるという、彼らにとっては多分最も条件の悪い場所のせいか、コロニーサイズはきわめて小さく（平均数10ペア程度）かつ分散しています。このアデリーの採餌生態（特に潜水行動）の研究が31次隊生物部門の主要な観測であり、基地から30km南の露岸に冷凍庫を改造した小屋を建て、3～4人で夏

期間中の生活を送っています。ただし研究者は私1人で、あとはサポートしてくれる人たちです。仕事の上での話し相手がいないことが、たまに心細くさせます。

生物部門では“環境モニタリング”観測員として1名が毎年越冬しています。決った場所での細菌のサンプリングなどがノルマと課せられますが、一定の枠内で自分の研究テーマをおこなうことができます。モニタリングの一環として、アデリーのセンサスも過去25年以上続けられていますが、こういった仕事にありがちなように、個体数変動要因を明らかにする、といった目的に沿うようデザインされているわけではないのがおしまれます。日本の南極観測は、このように気象・電離層・大気微量成分など、明確なテーマを持たないが、長期的に続けることに意義がある定常観測（オゾンホールが発見などは、こういった

息の長い観測によっている）と、4～5年で成果を上げるプロジェクト研究の2本立てで進められています。今回のアデリーの調査は大型動物センサスという環境モニタリングに含まれていました。（名目上は）

さて、残すところあと3ヶ月。「しらせ」にピックアップされるまで1ヶ月半となりました。ヌードカレンダーも見あき、「早く本物が見たい」という声が出ています（私はもちろん研究一筋ですが）。早く日本のサクラが見たい、生ビールを飲みたい（一年以上たったビールの味はひどいものです）、女の子のスカート姿が見たい、などなど……。この辺でやめておいた方が無難ですね。

◀1990年12月25日 南極ラングホブデペン
ギン小屋にて▶ (綿貫 豊)

事務局から

会費納入状況のお知らせ

本会では、1987年から事務処理にパソコンを導入して、各会員の会費の納入状況を、学会からの発送宛名ラベルに打ち出す仕組みをとってきました。その後の新しい個人に関する問い合わせなどが増加してきたので、再度この納入状況通知方法を説明します。

宛名ラベルの個人名の下に会費納入状況を書き込みます。ただし、すでにその年度分を納入されている方は何も印刷されません。年会費は5,000円で、前納制となっています。未納または不足の方には“会費未納〔〇〇〇円〕”とその額を表示しています。反対にその年度分を越えて納入された方には、“会費前受分：〇〇〇円”と表示しています。ラベルをよく確認して会費の郵便振込納入（現在、事務局と会計処理を切り放して行っていますので、書留は事務処理が二重の手間になるのでお止め下さい）をお願いします。特に、会費が端数金額となっている方は、次のお払い込みの時に必ず解消して下さい。それによっても入力作業が増加します。事務作業軽減のためご協力をお願いいたします。

なお、皆様が実際に郵便払込をされてからラベルへの入力は2～3週間程度後になり、学会誌やニュースの発送時は、ラベル貼りの作業を先行させるため、1週間程度早くラベルを打ち出します。したがって、ラベルには1ヶ月程度以前の納入状況を表示しているものとなっています。（会計幹事・福田）

(a) 会費が余分に納入されている場合

〒000 東京都新宿区百人町 1-1-1 〇〇 〇〇様 会費前受分：〔0000円〕

(b) 会費が未納の場合

〒000 東京都新宿区百人町 2-2-2 〇〇 〇〇様 1991年度会費未納〔0000円〕

日本鳥学会 1991年度大会 告知

今年の大会は東京・池袋の立教大学で開催されます。立教大学は狭いながらもツタのからまるチャペルや古い建物の残る大学です。多くの会員の方々の積極的な参加、発表を期待します。シンポジウムは「鳥と木の実(仮題)」で、鳥と植物の共進化の問題を取り上げる予定です(演者は交渉中)。

開催日程：1991年9月14～15日(土・日)

会場：立教大学5号館(豊島区西池袋3丁目)

費用：参加費：1,000円(当日1,500円) 懇親会費：3,000円(当日3,500円)

申し込み方法：振替用紙の裏面に(1)発表の有無(なし、口頭、ポスター、ビデオの別を記入)
(2)発表者氏名(連名の場合は全員) (3)発表タイトルを記入して、懇親会に出る方は4,000円、参加のみの方は1,000円を、郵便振替で東京8-19607 日本鳥学会91年度大会へ振り込んで下さい。申し込み〆切は7月31日(当日消印有効)。講演を申し込まれた方には、講演要旨の記入用紙を送ります(講演要旨の〆切は8月末日)。また8月中旬に参加申し込み者全員に大会プログラムを発送します。なお、自由集会を希望される方は、13日と15日の夜が使えます。

申し込み先：〒171 豊島区西池袋3丁目 立教大学一般教育部生物研究室

日本鳥学会1991年度大会準備委員会

Tel. 03-3985-2596 (Fax. 03-3986-8784)

大会実行委員募集!

関東在住の会員で、大会のお手伝いをして下さる方をご連絡下さい。(上田恵介)

シリーズ「研究室紹介」連絡先一覧〔 〕内は関係者

1. 上越教育大学学校教育学部動物生態研究室 (〒943)群馬県上越市山屋敷町1
Tel. 0255-22-2411 [中村登流]
2. 大阪市立大学理学部動物社会学研究室 (〒558)大阪市住吉区杉本3-3-138
Tel. 06-605-2584 [直通] Fax. 06-605-2522 [山岸 哲]
3. 東邦大学理学部海洋生物学研究室 (〒274)千葉県船橋市三山2-2-1
Tel. 0474-72-1141 [内線 3343] Fax. 0474-75-1855 [長谷川博]
4. 帯広畜産大学畜産環境学科野生動物管理学研究室 (〒080)帯広市稲田町
Tel. 0155-48-5111 [内線 466, 467] [藤巻裕蔵]
5. 農林水産省農業研究センター鳥害研究室 (〒305)茨城県つくば市観音台3-1-1
Tel. 0298-38-8825・8925 Fax. 0298-38-8837 [中村和男・藤岡正博]
6. 森林総合研究所東北支所保護部鳥獣研究室 (〒020-01)盛岡市下厨川字鍋屋敷72
Tel. 0196-41-2150 [内線 273] [由井正敏]
7. 秋田大学教育学部生物学研究室 (〒010)秋田市手形学園町1-1
Tel. 0188-33-5261 [内線 591] [小笠原暁]
8. 愛媛大学農学部生物環境保全学大講座環境化学研究室 (〒790)松山市樽味3-5-7
Tel. 0899-41-4171 [内線 368] Fax. 0899-43-5242・77-4364 [立川涼]
9. 北海道大学水産学部北洋水産研究施設海洋生態学部門 (〒041)函館市港町3-1-1
Tel. 0138-41-0131 [小城春雄]

日本鳥学会・日本比較内分泌学会合同シンポジウム

生態学的視点からのフィールドでの研究と、生理学的視点からの実験室での研究をしている人々が共通理解を得るために、日本鳥学会と日本比較内分泌学会が共催シンポジウムを開くことになりました。お問い合わせのうえ、是非ご出席下さるようお願いいたします。

記

日 時：1991年5月25日（土）午後1：00～5：00

場 所：東京医科歯科大学（東京・お茶の水）1号館7F講堂

演者及び題名：

1. 小藤 弘美（奈良女子大・人間文化）
カワガラスのふん中における生殖腺ホルモン
2. 水谷 広（三菱化成生命科学研）
羽が語る鳥の生活
— 安定同位体自然存在比の利用 —
3. 中村司・*伊藤正則・藤原恵（山梨大・生物*早稲田大・生物）
渡りとホルモン
4. 和田 勝（東京医科歯科大・生物）
生理学と生態学の握手は可能か

世話人：和田勝（日本比較内分泌学会） 連絡先 Tel. 0473-72-1136【内線61】

中村司（日本鳥学会） 連絡先 Tel. 0552-52-1111【内線3462・3470】

【幹事・委員の人事異動】 下記の異動が会頭によって承認された。（1991年4月7日付）

- ① 編集幹事：松岡茂氏（編集委員を辞任） ② 編集委員：正富宏之氏（編集幹事を辞任）
③ ニュース編集幹事：中村一恵氏。川内博氏は本号をもって、ニュース編集幹事を辞任。

【ニュース原稿の送り先変更】 編集部の変更により、原稿送り先を下記に変更します。

〒171 東京都豊島区西池袋3丁目 立教大学一般教育部生物研究室 上田恵介気付

鳥学ニュース編集部

編集後記

1983年以来7年余、ダブル博（長谷川博氏と）でやらせていただきました本誌の編集も、1年がかりで新編集部への移行が終わりました。我々にとっては大波・小波の連続でしたが、なんとか難破せずにゴールできたのは、会員の皆様のご協力の賜です。とともに無理難題を快く引き受けていただいた文英社印刷の寺田英雄氏のおかげと感謝しております。

90年代に突入し、世界情勢が大きく動き出した今、鳥学会も新しい時代へと入ろうとしています。その先陣を切る、次号からのダブル恵での新たな船出に幸多かれと祈って筆を置かせていただきます。長年のご愛読ありがとうございます。（川内）

鳥学ニュース

No. 39

1991年5月10日 発行

（会員配布）

発行所 日本鳥学会
国立科学博物館分館内

〒169 東京都新宿区百人町3-23-1
（振替） 東京1-6599

（電話）03(3364)2311

発行人 中村 司

編集者 川内 博・上田恵介

印刷所 文英社印刷